下簾

庇車

簾裏ノ縁青キ唐綾、上緒革崎ヲ入レズ、

〔輿車圖考五〕雨眉車

上緒とは、すだれのへりに、ちいさきかはあり、それに穴あり、すだれまくとき、そのかはの穴に、ひぢがねかけてとるむるなり、革崎いれずとは、そのかはの末に、金物なきをいふ也、

台記云、保延二年十二月九日、予〇藤原頼長乗二長物見車一〇中略於二二條町程一巻レ簾天、上緒、ひぢがねにかけんとするも、無二上緒穴一、予乞二下簡随身重文刀一穴ヲサシアケ天、ひぢがねにかくとある是なり、物見にも上緒あり、是もおなじ、

〔伊呂波字類抄志雑物〕帷裳シタスタレ俗云下簾、　下簾同

〔倭訓栞中編十〕そたすだれ　車にいふ、眞名伊勢物語に、帷裳をよめり、簾のそたに白き絹二はゞ、或はすそ濃にしてかくるなりとぞ、和名抄に幃幰、俗車簾車帷也といふ物なりといへり、

〔西宮記臨時八〕車

下簾　古時三位已上懸レ之、近代納言已上用レ之、

〔羽倉考二〕下簾不レ可レ爲二略語一之事

下簾ハ衣ニテモノセル物ナレドモ、簾ト云ハ、只簾ノ如ク前ニ垂ルガ故ナルベシ、直ニ其物ニ非ザレドモ、或ハ體、或ハ用ノ似タルヲ以テ、名クルコト少カラズ、〇中略諸抄ニ下簾ノ別名見エザレバ、略語ニテハ非ザルベシ、

〔三中口傳一〕一乗車儀事

御下簾插様

二幅アルヲ、右幅ノ左ノ端、一尺餘ガシモヲ取テ、筒貫ノ端ニハサムナリ、左又同レ之、其後簾ヲ巻